アドルと「神の価格」
――マムルーク朝期カイロの市場社会と王権

慶應義塾大学文学部
長谷部史彦

Ⅰ　序

マムルーク朝の首都カイロでは、１３７０年代以降、有力マムルーク軍人や穀物商人が支配的な力を行使する穀物市場において、投機的な傾向が強まり、穀価の季節変動が激化した。穀価の高騰や供給の不足に直面した都市の民衆（アーンマ）はパン屋や製粉所に殺到し、ムフタスィブ（市場監督官）やスルターンに対しても種々の要求を突き付け、異議申し立て、攻撃、非難などを行なった。こうした食糧騒動は、スルターン権力の市場介入を促し、臨時の救貧事業などの対応策を引き出す上で大きな役割を果たしていた。

この報告では、中世カイロの市場社会と王権の関係について、特に食糧騒動における都市民衆とスルターン権力の交渉や葛藤の「文化」を中心に論じたい。この問題に関してはすでにいくつかの拙論において考察を加えたが、今回の報告では、「アドル（公正）」と「スィール・アッラー（神の価格）」という２つのキーワードに的を絞って再検討を試みる。とりわけ、従来「適正価格」あるいは「公正価格」とみなされてきた「神の価格」について、その含意を具体的事例にそくしてもう一度考え直すことにしたい。

（※以下は報告の構成案である。）

Ⅱ　食糧騒動の行動形態とイディオム

１）食糧騒動の行動形態

２）食糧騒動におけるイディオム

Ⅲ　アドルと食糧騒動

１）マザーリム法廷と市場社会

２）マザーリム法廷と食糧騒動

３）食糧騒動と「アドルの実現」

Ⅳ　「神の価格」は適正価格か？

１）１４９７年エルサレムの布告文における「神の価格」

２）食糧騒動と「神の価格」

Ⅴ　結び

《参考文献》

１）長谷部史彦「１４世紀末－１５世紀初頭カイロの食糧暴動」『史学雑誌』９７編１０号，１９８８年.

２）同「イスラーム都市の食糧騒動：マムルーク朝時代カイロの場合」『歴史学研究』６１２号，１９９０年.

３）同「尖塔の上のドゥアー：カイロの民衆蜂起・１７２４年１１月」『イスラム世界』４２号，１９９３年.

４）「オスマン朝統治下カイロの食糧騒動と通貨騒動」『東洋史研究』５３巻２号，１９９４年.

５）Shoshan,B.,“ Grain Riots and the “ Moral Economy ”: Cairo，1350-1517 ”, *Journal of Interdisciplinary History* ,10/3,1980,pp.459-478.

６）hoshan,B.,*Popular Culture in Medieval Cairo*,Cambridge,1993.
（書評　長谷部史彦「ボアズ・ショシャン著『中世カイロの民衆文化』」『イスラム世界』４７号，１９９６年.）